

消滅の危機に瀕する各地の方言のデータ収集

消滅の危機に瀕する各地の方言のデータ収集

かりまたしげひさ（琉球大学）

1. 琉球方言の現状

いま世界の多くのマイノリティーの言語が消滅に瀕している。その危機的な状況は、19世紀以降の西洋化、近代化とともに、特定の価値観が支配的になり、言語に優劣をつけ、暴力的ともいえる圧倒的な力によってマジョリティーの言語への置き換えが短期間に起きた結果である。マイノリティーの言語の自立的な存続が困難状態に陥っている。

ユネスコは、日本国内においてアイヌ語が最も危険な状態にあり、沖縄県の与那国方言と八重山方言が重大な危険にさらされ、沖縄方言と国頭方言、宮古方言、鹿児島県の奄美方言、東京都の八丈島方言が危険な状態にあるという調査結果を2009年2月に発表した。

琉球方言の危機的な状況が進行するなか、研究者に対して琉球方言の継承・普及への貢献が求められていることを痛感する。方言を自在に使いこなせる堪能な方言話者の高齢化に伴う減少と、標準語化の影響による伝統的方言の急激な変容とが進行している。

変化や変容は避けられない。古いものがすべて望ましいものであるわけでもない。しかし、その変化・変容・消失が望まれたものでないとするなら、それを取り戻す方策を考えると、いまそこにあるものを持続的に維持していく方策を考えることは重要である。

母語話者がいなくなったあとでも非母語話者の学習者が発するであろうさまざまな疑問にこたえながら、琉球諸語の下位方言をまるごと継承させるには、できるだけ詳細で体系的な記述研究が必要である。個々の方言がどんなに小さくとも、それが固有の体系をもち、言語機能という点で大言語とおなじであるならば、簡単な会話だけでなく、どんな出来事も、どんなに高度で複雑な考えも、微妙で繊細な感情も表現できる言語として方言を活性化させること、そんな言語運用能力を次世代の人々に身につけさせることが真の継承であろう。琉球諸語が消滅の危機に瀕し、堪能な方言話者の数が減少していく現実に直面している。いまもっとも必要なことは、できるだけ詳細で体系的な記述研究をすすめることである。

2. 多様な琉球方言

約1千kmにおよぶひろい海域に島々が点在しているために、琉球方言内の方言差は非常におおきく、青森方言と鹿児島方言の違いに匹敵する。琉球列島の北の端と南の端とではことばがまったく通じないのはもちろん、与那国島と石垣島、宮古島と沖縄本島、奄美大島と沖縄本島のあいだでも方言では会話が通じない。沖縄本島のような大きな島ではその内部差もおおきく、南の那覇の人々は、北の、たとえば今帰仁村の人たちが方言ではなしはじめると、何をいっているのか理解できないことがあるほどである。奄美、沖縄、宮古、八重山の各諸島間で方言が異なり、むつつの下位言語を設定できるほど内部の言語差がおおきい。それだけでなく、沖縄島、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、久米島、宮古島、石垣島、西表島などの大きな島の方言は、母音の数や子音の数が異なったり、文法体系や語彙体系の異なる複数の下位方言グループに分かれている。あるいは、慶良間諸島

の中の阿嘉島、慶留間島、沖縄本島東側の久高島、津堅島、奄美諸島の請島、与路島、宮古諸島の大神島、伊良部島、八重山諸島の石垣島や西表島以外の小さな島々も個性的な方言である。恩納村恩納、具志頭村具志頭、旧具志川市具志川、国頭村宇嘉・辺野喜、奄美大島笠利町佐仁言、喜界島小野津・志戸桶・佐手久などのように周辺地域の方言と大きく異なる個性的な特徴を持った集落の方言がある。

3. The Boasian tradition (辞書と文法書とテキスト)

Tsunoda (2005)¹⁾は、危機言語の継承と再活性化の方法として包括的で体系的な辞書と文法書とテキストの3点セットの整備を提示している。危機言語としての琉球方言を全体として生きた形で継承・再活性化させるためにも The Boasian tradition と呼ばれる辞書と文法書とテキストの3点セットの整備は必要である。

琉球方言のばあい、辞書とテキストに関してはある程度の成果を残している。1万5千語以上の単語を記録した琉球方言の辞典が10以上の地域の下位方言で既に刊行されているし、民話を方言のまま記録した読谷村史民話編14巻、具志川市誌民話編3巻などの民話集や千首近くの諺を収録した諺集²⁾が主要な下位方言で刊行されている。近年は、複数の下位方言の文法記述もすすんでいて、一定程度の量と質を確保された下位方言もある。

研究蓄積の多い島・地域と不足している島・地域とがあり、その質と量は一様ではない。同じ島の中でも研究蓄積の多い地域と全く不足している地域がある。那覇市首里方言や今帰仁村与那嶺方言、石垣市市街地の四箇方言、奄美大島名瀬方言などのような、辞書や文法記述があり、音声テキストも多く残されている方言は少数である。琉球列島には、その存在の痕跡さえも残さずに消えてしまった方言、わずかな記録だけを残して消えた方言がある。いまはまだ母語話者はいるものの、わずかな記録をのこして消えていこうとする方言もある。記録し保存する作業が急がれる。

伝統方言の話されている全ての47の有人島ごとに少なくとも1冊ずつの方言辞典と詳細な記述文法書と音声テキストを残しておくことが必要である。大きな島には、下位方言グループごとに、そして個性的な方言ごとに方言辞典と記述文法書と音声テキストが望まれる。しかし、1万語の辞典や詳細な記述文法書を完成させるには長い時間が必要である。記録保存できる人員と予算には制約がある。

4. 音節一覧と格形式

今年度は、ある特定の方言の音節一覧表を作成してその語例を挙げ、録音すること、名詞の格形式の主要な用法を例文とともに示して録音すること、談話資料を録音することを目標にした。

音節とは、一度に発音しうる、ひとまとまりのきこえをつくる音声の最小の分節的な単位である。音節は、ひとつあるいはいくつかの音素によって構成されている。音節は単語の音声を直接構成する単位であり、1個またはそれ以上の数の音節が組み合わさって単語が形成される。1時間、あるいは数時間の談話テキストを残しても、その中に当該方言の音素と音節がすべて含まれるわけではない。特定の単語にしか含まれない、しかし、当該方言を特徴づける音素があるし、特定の音素のくみわさった音節がある。したがって、当

該方言の音素目録だけでなく、当該方言に存在する音節の一覧表を作成しておくことは、当該方言の音韻体系がどのようなものであったかを知る重要な手掛かりになる。当該方言の音節の語例を複数個記載し、その録音を残しておくことは重要である。

琉球諸語の格形式には、助詞なしのハダカ格、**nu** 格、**ga** 格、**ni** 格が全体的に共通にみられるが、一方で、与格の格形式に **Ngati** 格(名護市幸喜方言)、**Nkai** 格(那覇市泉崎方言)、**Nga** 格(石垣市四箇方言)など、地域によって形の異なる形式がある。したがって、どのような格形式があるかを列挙しなければならない。

次表の名護市幸喜方言の **ni** 格の名詞にみるように、個々の格形式は多義的である。

与格 あいて	taruja <u>puppu:=ni</u> nur-att-a-N. 太郎=TOP 祖父=ADD 叱る-PASS-PAST-IND (太郎は 祖父に <u>し</u> かられた。)
与格 くつつくところ	<u>panadzaki=ni</u> me: <u>ʃikatu</u> N. 鼻先=ADD 飯.NOM 付く-GER-NPST-IND (鼻先に <u>い</u> 飯粒が <u>つ</u> いている。)
与格 比較の対象	hanako=ja <u>tʃira=nu</u> ha:pa=ni na:t-u-N. 花子=TOP 顔=NOM 祖母=ADD 似る-GER-NPST-IND (花子は 顔が <u>お</u> ばあさんに <u>に</u> 似ている。)
所格 ありか	taru:=ja hudzu:=ra <u>to:kjo:=ni</u> u:-N. 太郎=TOP 去年=ABL 東京=LOC 居る-IND (太郎は 去年から <u>東</u> 京に <u>い</u> る。)
時間格 成立つ時間	taru:=ja <u>patʃigwatʃi=ni</u> ke:ti <u>ku</u> N. 太郎=TOP 八月=TIM 帰る-GER 来る-NPST-IND (太郎は <u>八</u> 月に <u>か</u> 帰ってくる。)

それがくつつく名詞が他の単語とどのような関係をあらわすかを表現する。他の単語との関係は、名詞の語彙的な意味に大きく依存するし、結びつく述語になる動詞の語彙的な意味に大きく依存する。その詳細を記述するには、たくさんの例文を収集し、それらを検討、分析するために時間を要する。一つの方言に存在する格形式は 10 数個であるが、それを抜き出し、個々の格形式の多義的な意味とそれが実現する条件まで含めて詳細な記述研究を実施するには時間が必要である。限られた人員で 47 の有人島の方言、個性的な特徴を有する方言で実施するにはたくさんの時間が必要である。記述しなければならないのは格形式だけではなく、とりたて助詞等の形式、動詞のさまざまな活用形、形容詞の活用形の抽出とその文法的な意味の記述も行なわなければならないし、さまざまなタイプの文の記述も行なわなければならない。

限られた人員と予算と日数の中で、本年度は、喜界島、加計呂麻島、沖縄県うるま市平安座島、南城市奥武島、南城市久高島、うるま市津堅島、石垣島・宮良、石垣島・黒島の各方言で、格形式とその代表的な用法を例文とともに記載し、録音資料を残しておくことにしたのである。そうすることで、詳細な記述に成功した主要な方言の成果を参考にしながら、当該方言の概要をつかむことが可能になる。そうした記述を琉球諸語全体にひろげていくことが必要である。

-
- i Tsunoda (2005) “Language endangerment and language revitalization”
 - ii 仲井真元楷 (1971) 『沖縄ことわざ事典』には 788 首、吉村玄得 (1974) 『沖縄宮古ことわざ全集』には 564 首、宮城信勇 (1977) 『八重山ことわざ全集』には 1057 種、狩俣繁久・上村幸雄編 (2003) 『石崎公曹の奄美のことわざ』には 1080 種のことわざがそれぞれ収録されている。